慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	川合貞一先生を憶ふ
Sub Title	
Author	橋本, 孝(Hashimoto, Takashi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1956
Jtitle	哲學 No.32 (1956. 3) ,p.1- 4
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000032-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

川合貞一先生を憶ふ

橋本孝

川合先生が八十五才の高齢を以て長逝されたのはつひ此の間のやうに思はれたが、数へて見れば早や九箇月も経つてゐる。月日のたつのはまことに早い。

私が初めて先生にお目にかかつたのは今から凡そ四十五年前の明治四十四年の陽春の頃であつたが、最後にお逢ひする機会を得たのは三年前の昭和二十八年三月二十九日であつたと記憶する。その日は幸ひ前橋市に本塾大学通信教育の集りがあつたので、私はそれに出席する傍ら、夜分久し振りに先生をお招ぎして、料亭の一室に次男の貞郎君達と卓を囲んで春宵の一刻を極めて愉快に過ごしたのであつた。当夜は偶然にも先生のお誕生日に当つたせいか、先生のお喜びはひとしほで、文字通り「且つ食ひ且つ語る」の上々の御機嫌であつた。尤もその頃の先生は既に歩行が多少不自由であつたが、時にはお孫さんを御連れになつてよく散歩をされ、気が向けば市立図書館に行つて読書をされ、或はお宅で原稿を書かれる等悠々自適の生活を営まれて居られたせいであらう、お見受けしたところ全く童心に還へられ、如何にも好々爺然たる風貌に接し、私はいよいよ先生の寿康の無窮ならんことを祈念してお別れしたのであつた。

* * * *

川合先生は明治三年三月大垣市外に生れ、十七才のとき笈を負ふてはるばる上京して慶応義塾に入学、明治二十五

年の十二月、二十三才を以て本塾大学部文学科を卒業された。その後先生は英語の中等教員の検定試験に合格されるや招かれて明治二十八年四月新潟師範学校に赴任し、居ること一年有半、翌二十九年十一月には職を辞して再び上京された。そして十二月には待望の母校に就職することになつた。

かくして先生は爾後昭和十八年十二月に本塾を退任されるまで、四十七年に及ぶ永い永い三田山上に於ける研究と教授の生涯の、記念すべきスタートを切るに至つた。

先生は生来蒲柳の質であつたらしく、日頃健康には極度に注意を払はれ、食事に際しても常人の倍以上の時間をかけて念入りに咀嚼し、また私共の記憶にある桐ケ谷から奥沢時代にかけても、塾への往復は晴雨寒暖に拘らず常に徒歩を以てし、特別の場合を除いて殆んど乗り物を利用されることはなかつたやうに思はれる。しかも先生の歩き方はパタパタと一種特有な音をさせつつ、先生独自のペースを持つたもので、風が吹かうが雪が降らうが終始一貫変りのないものであつた。けれども先生のこのペースは何も歩行のときに限られてゐた訳ではない。先生のあらゆる生活の部面に亘つてこの特有なペースが支配してゐたと云つて差支へない。否かやうな個性に根ざす独自のペースをあらゆる部面で厳守したからこそ、平素余り頑健でなかつた先生が、あのやうな寿康と学徳とを積まれ、教育家としても亦学者としても、特筆に値する大いなる足跡を残すことが出来たのではあるまいか。

ところで先生の学者としての生涯に於て忘れることの出来ない出来事の一つは、何んと云つても明治三十二年夏選ばれて義塾第一回海外留学生として渡欧し、滞独四年の前半はイエナ大学に於て当代の碩学オイケンやリープマンに哲学を学び、チーエンやラインの講莚に列して心理学や教育学の教へを受け、その後半はライプチッヒ大学に移り、フォルケルトやヴントに就いて哲学や心理学を学んだことであつたらう。

殊に先生がヴント研究室の一員たることを許され、親しくヴントの指導の下に、心理学のみならず広くヴント一流の哲学的考へ方を学ぶ機会を得たことは、後年先生の思想の形成発展に直接間接に影響するところ決して少なくなかつたことは云ふまでもない。

先生は、明治三十六年春帰朝するや哲学、心理学、教育学及び論理学等を講じ、後には認識論、社会学、倫理学から美学、独逸文学等の学科目をも担当するに至り、まさに八面六臂の活躍振りを示した。学問が極端に専門分化した現在から見れば、時代の風潮とは云へ、まことに超人の業としか思はれない。けれども先生なればこそかやうな困難な業をば易す易すとこなし、綽々たる余裕すら示してゐたのである。この一事を以てしても、先生が如何にすぐれた頭脳の持主である上に、人一倍の努力家であり且つ博学多識な篤学者であつたか、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

尤も先生はいはゆる「象牙の塔」に立て籠る灰色の学究に必ずしも満足せず、時には冷徹なる理智の底に烈々たる情熱をたぎらせ、時局に激していくつかの論著を公けにしたこともない訳ではなかつた。しかし先生の著書や論文を読めば何人も分る通り、多くは時代と共に歩みながらも、徒らに時流に投せず、流行思想に阿らず、複雑多岐に亙る社会の実相に眼を徹し、或は歴史的現実の底に独特の因果の理法の支配することを闡明するなど、各種の問題に対してまことに行き届いた先生一流の哲学的考察を施してゐるのである。

一体先生は三田における代表的学者の一人であつたばかりでなく、他面卓越した教育家でもあつた。これは資性恬淡にして純真、已れを持すること厳なれども他人に対しては至つて寛大謙譲であつて、いはば円満具足の人格者であつた先生にして初めて可能なのである。先生は在塾四十余年の教授生活中、明治三十八年五月大学部に文学科が再興されるや、推されてその科長となり、翌三十九年三月には普通部主任をも兼ね、関東大震火災のあつた大正十二年九

月には、田中萃一郎先生の急逝の後を受けて、普通部主任より大学予科主任に転じ、昭和九年三月までこの兼務を続けられた。加之、大正九年新大学令により大学部が名実共に大学に改編されるや、引き続き文学部長に就任し、爾来昭和十三年三月末その兼職を辞するまで前後三十三年の長年月の間、学部長を初めとし各部の主任として義塾の教育行政の枢機に参劃し、幾多の貢献をなしたことは、わたくしどものなほ記憶に新たなところである。しかも先生は塾内に於て活躍したばかりでなく、塾外に於ても、幾多のすぐれた著書や論文によつて学界に重きをなすと共に、各種の講演会や研究会の講師としても光つた存在であつた。

＊　＊　＊　＊

明治四十四年の春以来三十余年の永い間、学生として将たまた教師として、親しく先生の膝下にあつて公私共に何くれとなく温い指導を受けた私にとつて、塾の思ひ出は、先生とのえにしを切り離しては全く成り立たない。私の脳裏には、今なお二十年三十年以前の先生のにこやかな面影すら、走馬燈のやうにいろいろの思ひ出と共に彷彿として浮んで来る。しかしその先生も幽明境を異にして今や亡し。

（昭和三十一年三月）